Filippo Costa

フィリッポ・コスタ

地域：Veneto　ヴェネト

地区、村：Crespignaga クレスピニャーガ

醸造・栽培責任者：Filippo Costa　フィリッポ・コスタ

HP：https://www.facebook.com/filippo.costa.507

【ワイナリーと造り手について】

ヴェネト州、トレヴィーゾの街から北西、アーゾロの地域でワインを造るフィリッポ・コスタは同地域の出身。高校を卒業するころからワイン造りへの興味が強くなり、農業高専へ進み、その後パドヴァ大学でも栽培と醸造学を修める。生まれ育った地域でのワイン造りを当初から考えていたフィリッポは在学中の 2009 年から、アーゾロのワイナリーで働き、卒業後も栽培、醸造コンサルタントとして活動してきた。その後 2017 年に、家の一部をセラーとして少量ずつワイン造りを始める。フィリッポの生まれ育った家は平地の村にあり、両親は農家ではなかったが、彼の祖父は牛を飼う小さな農家だった。祖父の仕事を手伝ったことはなかったが、ブドウ栽培のために畑に立つことは祖父との対話でもあり、自身のルーツを感じることのできる大切な時間なのだそうだ。

栽培学と醸造学を修め、長らく醸造コンサルタントとしても働いてきたフィリッポだが目指すべきワイン造りはあくまでコンタディーノ、農民の造るワインだと考えており、尊敬するワイナリー、感動したワインとしては、ブルネッロのソルデラ、バローロのリナルディ、そしてガッティナーラのマルコ・ペッテリーノを挙げている。また同地域で卓越したプロセッコを造るカー・デイ・ザーゴのクリスチャンも共にワインを飲む交わす仲であり、フィリッポの言う、昔ながらの農民のワインという点においても学ぶべき点の多い同世代の生産者として尊敬している、と話す。

【畑と栽培について】

フィリッポは自身がヴェネツィア人であるという自己認識を強く持っており、ヴェネツィア人によって見出されたコッリ・アゾラーニの丘に畑でのワイン造りにこだわっている。品種も全て土着品種のみで、白品種：グレラ、ビアンケッタ・トレヴィジャーナ、ラッビオーザ、赤品種：レカンティーナ、ペーコロ・スク―ロそしてレカルディーナというフィリッポが独自に研究を進めてきて、2020 年に植樹した赤品種も栽培している。畑はラ・フランツァとカ・ペーザロという 2 か所の畑を所有しており、所有敷地面積は 7ha、そのうち 3.8ha がブドウ畑であり、ビオロジック農法で栽培。

畑のエリアはアーゾロ・プロセッコ（Asolo Prosecco）のエリアにあり、もしスプマンテを造れば DOCG も取得可能だが、フィリッポはあくまで“ヴェネツィア人達の愛した”この地域のスティルワインにこだわっている。

《　ラ・フランツァ　》

トレヴィーゾの北西、クレスピニャーガというコムーネにある丘の名前。1717 年のヴェネツィアの登記簿台帳でも確認できる地名で、ヴェネツィア共和国のためにワインを造ってきた歴史ある土地。1980 年代までは見渡す限りブドウ畑だったが、産業の発達やフラヴェシェンツァ・ドラータという虫により衰退してしまったブドウ栽培を、フィリッポは復興させようと邁進している。鉄分を多く含む赤土土壌に含まれる火打石に目を付けたヴェネツィア人達によりブドウ畑として開拓されていった畑で、彼のトップキュヴェ：ラ・フランツァのビアンコとロッサが生産される。

《　カ・ペーザロ　》

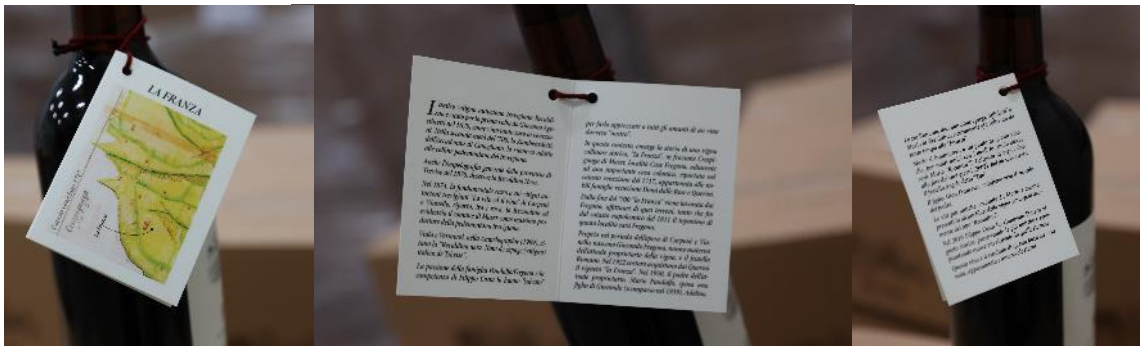
16 世紀にヴェネツィアのペーザロ一家が住んでいた別荘の名前から、カ（家）・ペーザロと呼ばれている。クレスピニャーガのすぐ北、アゾラーニ丘陵の麓に位置する。フィリッポは、この別荘のすぐ目の前にある、一部樹齢 60 年を超える古木の植わる畑を 1ha 借りて、栽培している。何世紀にもわたりこの丘陵地帯で生きてきたヴェネツィア人一族を偲んでこの名前をつけた。石灰質の礫岩を含む粘土砂質土壌の平地の畑。

【セラーと醸造について】

ワインを造り始めた 2017 年 VT から 2021 年 VT は自宅の一部でワインを造っていたが、2022 年からはラ・フランツァの畑の近くの小屋を借りて醸造。2024 年 VT の醸造までには、ラ・フランツァの敷地内にセラーを建設予定。

醸造設備も 2023 年現在、非常に簡素なもので、除梗機、破砕機とプレスのステンレスタンクのみで醸造をしている。

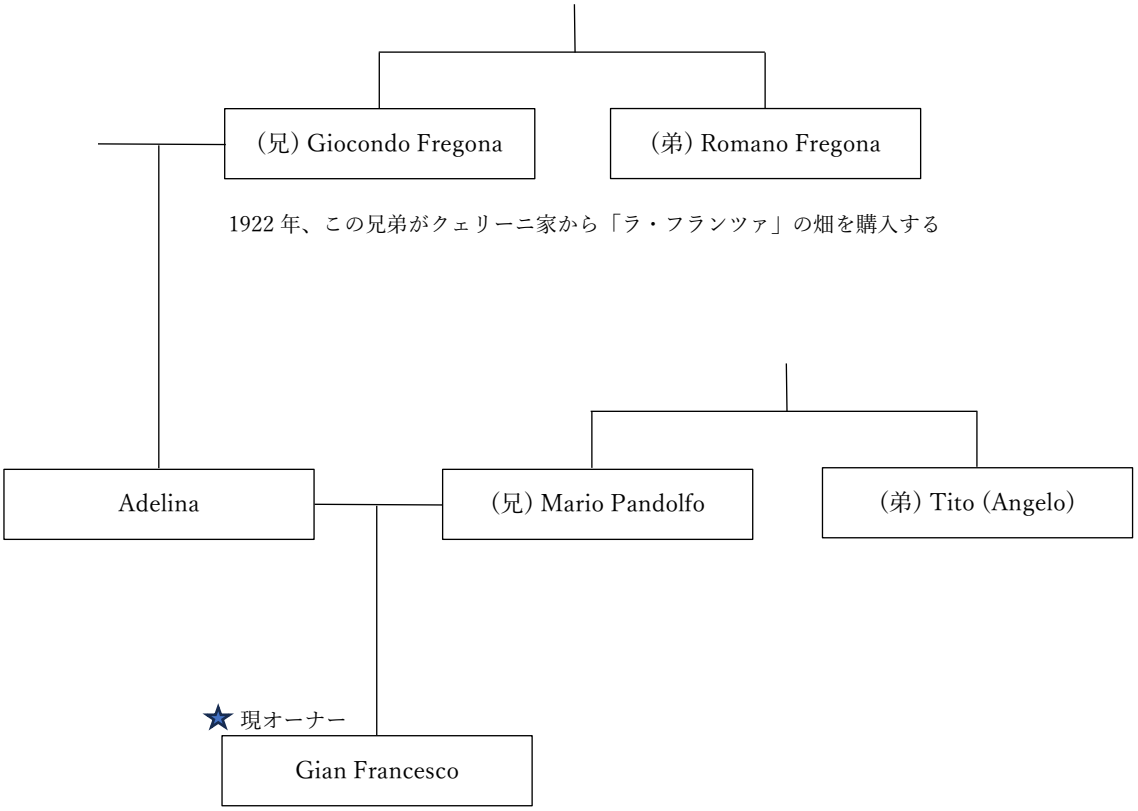
【ラ・フランツァの区画について】



1679 年、ヴェネツィア人にとって非常に大切なワインであるとして、ジャコモ・アゴスティネッティ氏により、トレヴィーゾの土着品種であるレカルディーナについて初めて言及した。また 18 世紀後半には、アカデミア・コネリアーノのザンベネデッティ氏が、レカルディーナはトレヴィーゾの山麓地域に適した品種であると伝えた。
1870 年のトレヴィーゾ地域でのブドウ品種学においても、レカルディーナ・ネーラについての記述がある。1874 年には、カルペネ氏とヴィアネッロ氏によるトレヴィーゾの土着品種に関する基礎研究「ラ・ヴィータ・エ・ディル・ヴィーノ（ブドウ樹とワイン）」においても、赤ワインに言及する中でレカルディーナの名を挙げ、当時のトレヴィーゾ山麓の主な生産者としてマサール自治体を取り上げている。その後 1909 年にもブドウ品種学の中で、「レカルディーナ・ネーラ：イタリア・トレヴィーゾの品種」と、ヴィアーレ氏とヴェルモレル氏は、言及している。

そして現在、パンドルフォ・フレーゴナ家の情熱と、フィリッポ・コスタの力添えにより、この品種は“救済”され、真に”我々の“ワインを愛するすべての人に楽しまれ、喜ばれることが期待された。
この文脈の中で、マサール自治体・クレスピニャーガ村、丘陵地の歴史的なブドウ畑「ラ・フランツァ」の物語が浮かび上がってくる。 - この畑は、1717 年のヴェネツィアの土地台帳にも記録の残る歴史ある場所で、地域の重要な農家に隣接しており、当時ヴェネツィアの貴族であったドーナ・ダッレ・ローズ家とクェリーニ家の所有となっていた。
18 世紀の終盤から、「ラ・フランツァ」はその土地の借主であるフレーゴナ家によって耕作されるようになり、それが理由で 1811 年ナポレオン統治時代の土地台帳以来、この土地は「フレーゴナ」という地名で呼ばれるようになった。
カルペネ氏とヴィアネッロ氏が研究をしていたまさにそのとき、畑の現在の所有者の母方の祖父であるジョコンド・フレーゴナと、その弟のロマーノが誕生した。1922 年、彼らはクェリーニ家から「ラ・フランツァ」の畑を購入する。1950 年、現所有者の父であるマリオ・パンドルフォはジョコンドの娘であるアデリーナと結婚した。このときジョコンドは、すでにこの世を去っていた。（1939 年死去）
マリオとアデリーナの叔父にあたるロマーノは、マリオに深い信頼を寄せ、「フランツァ」で長年栽培されてきたこのレカルディーナを、彼に”託す”ことにした。マリオはこのワインに惚れ込み、このワインを一緒に分かち合った友人たちから、マリオ・”レカンティン”と呼ばれるようになった...!!

彼は、晩年（2002 年）まで畑を耕作し続け、その後 ”ティト“ と呼ばれ親しまれた弟のアンジェロが引き継いだ。彼の息子のジャン・フランチェスコは、父の強い思いを守り続けている。マリオから引き継いだもっとも古いブドウ木は、いまもいくつかの畝に残り、これらは遺伝的に「レカルディーナ」の子孫である。

2019 年、フィリッポ・コスタは、もっとも古い木をそのまま残しつつ、その古木からの接ぎ木を新しく植えていくことで、この歴史的区画を再興させている。このワインが、忍耐強く、粘り強く、情熱的で、愛に満ちた歴史の産物であることがわかるだろう。

〈家系図〉